

郎、□永井源三郎など數多あるべし、□年號不詳分、○下略

〔窓の須佐美追加〕萩原源兵衛と云官府の士、奴僕罪ある由にて刺し殺しけり、その奴の兄なる男ありけり、いかに主なりとて、弟をあえなく殺されたる、その怨むくふべしとて、其家の奴となりけり、萩原早く見知けるが、さらぬ體にて鎗を持する奴と定て、出入に供しつゝ、五年をへしが、終にあやしき事も無りけり、さて有てかの奴、此春は暇給べしと云に、萩原云やう、年久しくつかひて、つねに怠らず勤ぬれば、猶もあれかしと思に、何とてさは云ぞ、直に聞べしとて呼ければ、刀を脱し、身を改めて出つゝ、云やう、されば弟を殺され申つる故、怨申べき心得にて、五年以來つかへ候が、主君の威光さすが思ひよるべきよすがなく、且は殊更に憐給り、かたぐゝ恨申さん心うせはて候、此上は世を捨て、法師とならんと存候とて、即髪を切涙を流して申ければ、奇特なる心入なり、とくより汝が心を知ぬるぞかし、その申所も聞届ぬ、さらば衣にても調せよとて、金をあたへてつかはしけるとぞ。